

1. はじめに

聴覚障害児教育方法論 I は、3 回生の実習を終えて、聴覚障害児教育に種々野疑問や想いを抱いているこの時期に、教育への幅広いアプローチを整理して学んでいくことができる時期である。

そこで、授業の目的を以下の様に定めた。

「難聴児の聴覚学習の困難さは多様である。聴覚学習の基本的理論を学ぶなかで、聴覚障害児の指導の実際を通して、臨床指導への入り口を体験する。併せて、聴覚障害特別支援学校の教員および聴覚臨床領域での幼児児童等の小児の支援技術を実習を通して学ぶ。」

そのため、日本語ではすぐに読み飛ばしてしむと考へ、『The deaf child in a hearing family』を教科書として英語の原書講読を試みた。基本的には、一人一章とし、要約を提出させ、授業毎に担当者にレポートさせ、論議をすることを予定していた。

結果としては、よく勉強してきた学生もいれば、そうでない学生もいた。ほぼ全員がパワーポイントを用意して望んだが、レポート能力は必ずしも十分とはいえなかった。

以下、今年度のアンケート結果をまとめてみる。この授業の受講生は、全員 3 年生で、特別支援教育専攻の 8 名と教育専攻の 1 名の計 9 名の受講であった。

過年度の「心理音響学」の昨年度の授業との比較をしてみると以下のようなになった。

1. 授業への参加について

①授業への出席	心理音響	方法論 I
90%以上	5	7 人
70%以上	7	2
②出席した授業への意欲的な取り組みの割合		
90%以上	2	1
70%以上	0	5
50%以上	7	2
50%未満	3	1
③授業の予習・復習時間		
3時間以上	0	1
2時間程度	0	2
1時間程度	3	5
ほとんどしない	9	1

2. 授業内容について

④授業の目的や意義の提示	心理音響	方法論 I
提示された		2
ある程度		6
あまりない		1
されなかった		0
⑤授業への興味・関心		
持てた	2	7
ある程度持てた	5	1
あまり持てなかった	5	1
⑥授業からの新しい知識や考え方		
得られた		6
ある程度得られた		3
あまり得られなかった		0
ほとんどなかった		0
⑦授業の理解		
よく理解できた	0	1
ある程度理解できた	6	8
あまり理解できなかった	3	0
ほとんどわからなかった	3	0
⑧この授業は専門領域への力になるか		
思う		5
ある程度		4
あまり思わない		0
思わない		0

3. 授業の方法（4点満点での平均点です）

⑨教員の話し方や進行具合	3. 4
⑩質問や発表の機会	3. 8
⑪板書・資料提示・配付資料の適切性	3. 2
⑫課題の量や程度の適切性	2. 7
⑬授業の準備や工夫	3. 2
⑭授業への自主的な取り組み	3. 0
⑮担当教員の熱意	3. 7
⑯授業への満足度	3. 2

4. 教育学部の DP について(主要関連項目のみ)

知っている者 8 名 知らない者 1 名

DP 1：特別支援教育に関する確かな知識と得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

向上していない	2
どちらかといえば向上してない	1
どちらかといえば向上	1
向上した	4

DP 2：聴覚言語障害児，知的障害児，肢体不自由児，病
虚弱児，重複障害児，発達障害児等の教育現場で生じてい
るさまざまな教育課題について論じ，適切な対応を考える
ことができる。（思考・判断）

向上していない	2
どちらかといえば向上してない	1
どちらかといえば向上	1
向上した	5

DP 3：子どもの発達に応じた授業の構成や教材・教具の
工夫ができ，個に応じた指導や説明ができる（技能・表現）

向上していない	1
どちらかといえば向上してない	3
どちらかといえば向上	3
向上した	2

DP 4：自己の学習課題の明確化（関心・意欲）

向上していない	1
どちらかといえば向上してない	4
どちらかといえば向上	1
向上した	2

DP 5：専門的職業人としての使命感や責任感（態度）

向上していない	4
どちらかといえば向上してない	2
どちらかといえば向上	0
向上した	2

3. 総括

これらのアンケート結果からの特徴的な点
をあげると以下のようなものである。

①授業への参加：授業への出席、意欲的な取
り組み、予習復習の時間のいずれもが、1年
生より良い結果であった。3年生の聾学校実
習後の授業であり、それなりに専門への意識
が芽生えてきた結果であろう。また、今回は
英語の原書のレポートということより、勉強
せざるを得なかったためと思われる。

が、70%程度が12名中7名、意欲的な取
り組みは、10名までが50%以下であり、予
習・復習ではほとんどしなかったが10名以
上となり、昨年度までとは全く違った状況で
あった。これからの専門の聴覚と関わっての
音の理解の大切さ等を実験等を通して行った
にもかかわらず、その意図は必ずしも伝わ
っていなかった。特に今年度は、受け身的な姿
勢が目立った年であった。

②授業内容：3年間の大学生活の中で、目的
や意義の提示や興味・関心は、年ごとに高ま
っていた。しかし、今年度の3回生は、興味
・関心は極めて高かった。また、新しい知識

や考え方、理解も評価が高かった。これは、
使用した原著が2013年の最新版であった
ことが大きく影響しているものと思われた。
その結果、授業への専門領域の力になると感
じたのであろう。

しかし、これだけの意志化がなされても、
自分の担当外のことには全くとっていいほ
ど関心が無く、与えられた担当範囲のみの報
告で終わっており、それ以上に報告内容を深
めることはなかった。

③授業の方法：教員の話し方や進行具合、質
問や発表の機会、板書・資料提示・配付資料
の適切性、時間配分など、全般的な進め方、
配付資料・教科書など教材の適切さ、担当教
員の熱意等はおおむね良い評価であった。

しかし、課題の量や程度については、なお、
問題を残した。質問を通して、具体的に課題
を提示したにも拘わらず、十分に対応でき
ていなかった。これらのことから、学生の取り
組みの意識をいかに高めるかが大きな課題で
あろう。また、課題の出し方にも検討の余地
があると思われた。

一方、発表に際しては、パワーポイントを
うまくまとめており、この点は評価できた。

また、上記の結果は、学期途中でとったDP
の評価との意識のずれを大きく感じさせられ
るものであった。DPとの関連の評価上では、
積極的な評価が得られていた。

教科書の利用については、指定箇所だけ
でなく、記述されている事象を擬似体験した上
で考えさせ、調べさせ、その上で種々論理的
に説明を加えることが必要となろう。教科書
に頼ることなく、聴覚障害と深く関連づけて
話題を進めることも大切であったようだ。ま
た、教科書の使用に際しては、どこまで、ど
う利用するかをさらに検討し、授業目的と学
生のレベルや興味にあわせた課題を出すこと
が望まれる。

今回の授業においては、興味づけはできた
ものの、授業の改善が十分でなかったことが、
非常に受け身的な学生の姿勢に繋がったと思
われる。その意味では、日常生活や難聴児の
特性との関連を視点においた授業の展開や説
明を今後積極的に取り入れていきたい。

最後に、毎年度のDPを振り返り、学生に対
して、授業の意義と目標をさらに明確にして
取り組む必要があると思われた。